

|                    |  |
|--------------------|--|
| 会議名                | 「関東地域における飼料イネの資源循環型生産・利用システムの確立」<br>研究成果発表会  |
| 開催日時               | 平成 19 年 12 月 1 日 13 : 00 ~ 12 月 3 日 15 : 00  |
| 開催場所               | つくば国際会議場大ホールおよび常総市水海道(放牧地)   |
| 主催者                | 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター   |
| 参加人数(概数)           | 約 140 名  |
| 1. 会議の概要<br>(資料添付) | <p>(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センターは、食料自給率の向上のため、飼料用のイネを作り牛の飼料として利用する技術の普及・定着を目指して、畜産草地研究所、茨城県農業・畜産総合センター、千葉県畜産総合研究センター、埼玉県農林総合研究センター、長野県農業総合・農事・畜産試験場、日本女子大学との共同プロジェクト研究、地域農業確立総合研究「関東飼料イネ」を平成 16 年度から実施してきた。この間に得られた種々の研究成果を主に生産者、飼料イネを給与して生産された畜産物の消費者に伝えるために本講演会と展示会を開催した。</p> <p>研究者による講演(13:00~14:35)</p> <p>1. 「飼料イネとは？」と題して、関東飼料イネ研究チーム長の石田元彦氏から、プロジェクトの目的、本日の講演会で使われる「稲発酵粗飼料」、「サイレージ」などの用語の解説があった。</p> <p>2. 「牛が喜ぶ飼料イネを作ろう」と題して、「ポイントは何(千田雅之氏)」、「栽培する技術(石川哲也氏)」および「収穫する技術(井尻 勉氏)」について報告があり、これまでの技術開発によって関東地域に適する専用品種を用い 1 ha あたり 20t の乾物収量を得られる施肥法が開発されたこと、早生、中生、晩生の品種を使うことによって適期刈りの期間が拡大したこと、細断型ロールバール調製用の専用収穫機を開発し、収穫時の圃場ロスやカビ発生による廃棄のない稲発酵粗飼料調製が可能になったことなどが報告された。</p> <p>3. 「飼料イネで作ろう 牛乳、牛肉」と題して「飼料イネはどんなエサ」(樋口浩二氏)、「ビタミンでいっぱい！飼料イネ」(三枝貴代氏)、「飼料イネで大きく育て！ビタミン豊富な牛肉づくり」(井出忠彦氏)および「美味しいぞ！ライスビーフ」(飯田文子氏)から飼料イネの給与技術、畜産物の品質に関する報告があった。しかし、同じイネ科植物でも栄養的な特性の異なる飼料イネと輸入チモシーの栄養価を比較するなど、やや首をかしげるような、我田引水的な報告もあった。</p> <p>4. 「まだまだ、あるぞ 研究成果」と題して茨城県、千葉県、埼玉県および長野県の畜産関係研究機関から現地実証試験あるいは飼料イネを給与した肥育牛の肉質に対する消費者の反応についての調査結果などについて報告があった。</p> <p>アトラクション (14:40~15:10)</p> <p>酪農家で、シンガーソングライターの村川徳治氏による「乳ミュージック」として「うしうしサンバ」などの演奏があり、場内がかなり沸いた。</p> |

飼料イネを与えて作った牛乳、牛肉の試食(15:10~16:00)

休憩時間に相当する時間帯に、飼料イネを給与して肥育した褐毛和種(はまさり牛)と地産地消のロゴマークつきの牛乳(うしのちち)の試食と試飲が行われた。

耕種農家と畜産農家の方々をパネラーとしたパネルディスカッション

(16:00~17:00)

これまで開発した収穫機の改良、収穫適期の拡大技術、放牧の活用および畜産物の高付加価値化(マーケティング)等の技術に対する飼料イネの生産者、飼料イネを利用している畜産農家および消費者をパネラーとした意見交換が行われた。議論のポイントはこれまでに開発された技術は取り入れられるか、技術を導入した場合に期待できる成果および技術を取り入れようとした場合不足している点の3点であった。この中で、水田放牧は、中山間地の技術であり、関東平野のような立地条件ではもっとほかの技術があってもよいのではないかという意見が出された。

2. 飼料イネと組み合わせた放牧地の見学(12月2日(日) 8:45~12:00)

常総市(旧水海道市)で飼料イネのホールクローブサイレージ、耕作放棄水田に放牧されている牛が飼料イネを食べている様子を見学した。水田に立毛放牧されている様子は写真参照。立毛状態の稲は電気牧柵で仕切れられ、食べ残しがないようにストリップグレーディングが採用されていた。遠方の水田には稲のロールバールが置かれている。

3. 飼料イネ技術の展示会(12月2日(日)12:00~15:00)

つくば国際会議場 大会議室 102 において、飼料イネに関する研究成果がパネル展示され、いわゆるポスターセッションが行われた。その他飼料イネ



|                             |  |
|-----------------------------|--|
|                             | 専用種子、自走細断型飼料イネ専用収穫機も展示され、飼料イネを与えて作った牛乳、牛肉の試食が行われた。   |
| 2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題 | <p>耕作放棄水田を団地化し、飼料イネを栽培して、主に肉用牛生産に利用することは、それぞれの地域の特徴を生かして全国的に研究されている。しかし、経営的には、耕畜連携の問題もあり、また転作補助金でかろうじて赤字にならないような状態である。水田農家の高齢化に伴い、耕作放棄水田は今後増加すると考えられるので、より低コストで飼料イネ、およびイネのホールクロップサイレージ生産技術の開発が重要である。</p> <p>放牧にはいわゆる牧番(放牧管理者)が必要であるが、水田放牧では草地放牧とは異なり、単に牛と草地(水田)の管理のみではなく、水田農家と畜産農家との関係を良好に保つことも重要な仕事であり、人材の育成が必要である。</p> |
| 3. その他の発表課題で関心のあったもの        | 特になし。  |
| 4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等 | 飼料イネの利用技術開発は一種のブームになっており、独立行政法人、都道府県を問わずそれぞれ独自の発想で研究がなされている。このため、飼料イネ問題全体を見渡して、欠落部分のないような体制の構築が必要である。  |
| 5. 会議の所感                    | アトラクションや試食を取り入れるなど、通常の研究発表会とは一味違った発表会であった。またパネルディスカッションも、講演者に対する質問に終わりがちであるが、技術の評価をテーマにしていた点は評価できる。  |
| 報告者                         | 伊藤 稔   |